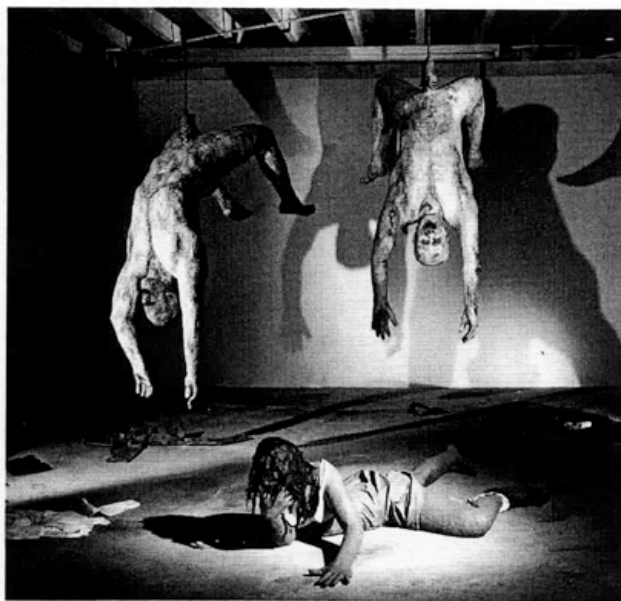


from Abroad

サンタ・モニカ海岸を背にして、もうすっかり真夏の気候を迎えた五月のウイルシェアー大通りを十五番街の交差点まで来ると、新築のメデイカル・ビルディングの一階のショー・ウィンドウに、ふたつの白い裸体が天井からぶら下がっているのがいきなり目に入る。オフィス街におけるこの異様な光景はロサンジェルスのアートイスト、エド・マッセイによる「モラリティ／モータリティ」(道徳／死ぬべき運命)と題されたインスタレーションである(五月二日―二十九日)。車を降りて近づいてみると、靴やハンドバッグが取り散らかる床に、もう一体の女性像が這いずるようにしているのが見える。そして天井から吊るされたふたつの白い裸体は、男性器をロープで縛られているのがわかる。この等身大の人物は、人体の石膏模型をポリウレタンで再生したもので、白く塗ら

from Los Angeles  
ロサンジェルス  
静世ベシカー Shizuyo Becker  
Ed Massey



エド・マッセイ/Ed Massey 「モラリティ／モータリティ」展より  
Courtesy the Artist

れた男性像に対し、女性像はリアリティックにペイントされている。マッセイをビヴァリーヒルズに訪ねると、インテリアとして効果

的に配置した自分の作品に取り囲まれたなかで、「今展はロサンジェルス、シカゴ、ニューヨーク、ワシントン、マイアミで同時に発表したが、このつぎはぜひ東京を含めて、インターナショナルなかたちで同時発表をしてみたい。ギャラリー・スペースは見る人に制限があるので、パブリック・スペースで発表し、大勢の人に見てもら

い、私の訴えようとするテーマについて論争を巻き起こしてもらいたい。私はいつも作品の主題を身の回りから取り上げている。今展ではレイプされた女性の悲惨さと、強姦に対する刑罰が軽すぎるために、同じ罪が繰り返されているということを訴えた。つぎのプロジェクトではホームレスを扱っている」と語ってくれた。

大学で社会学を専攻したというマッセイは企業組織を皮肉った作品や、麻薬、失業問題など、現代社会を風刺した立体作品をつくりつづけているが、昨年は日米関係をチェスの駒で巧みに表わした「チェック・メイト」と題する作品で話題を呼んだ。マッセイの作品は、人びとが日常茶飯事として麻痺してしまつた身近な社会問題を、そのままずばり美術作品にして再確認を呼び起こすことを意図している。深刻な問題を取り扱っているが、一見ユーモラスなのは、ロサンジェルス生まれの作家のポジティブな性格が反映されているからである。

(上) 静世・ベシカー/オーガナイザー